

行政機関の庁舎は、県の建設を公約としていた。県庁、市は市役所、町は町役場、村は村役場である。だが八戸市の庁舎は八戸市庁が正式な名称である。とはいえ、市庁は市長と発音が一緒。紛らわしいため市役所と呼ぶ職員も多い。

1960（昭和35）年11月3日、八戸市の新庁舎落成式が行われた。岩岡徳兵衛市長は、市制施行30周年事業の一環として、新庁舎の石碑は、今も庁舎の正面

入口付近にある。当時の八戸市は高度経済成長に乗って赤字再建団体を脱却。新産業都市に名乗りを上げようとしていた。その意気込みが、北奥羽の中心都市に相応しい「市庁」の言葉を選んだ背景にあったのだろう。

しかし、中には青森市にある「県庁」への対抗意識の現れだと憶測する人もいた。

しかし1968（昭和43）年5月16日の十勝沖地震で、塔屋の最上階が倒壊。職員1人が死亡し、数人が怪我をする大惨事となった。このため塔屋は撤去された。

その後、八戸市は復旧対策と共に街並みを整備していった。市庁北隣にあった八戸小学校は、1974（昭和49）年1月の火災で全焼。翌年5月、跡地と三八城公園の一部に八戸市公会堂ができた。市庁自体も老朽化し手狭となったので、市制施行50周年記念事業の一環として新庁舎の建設に着手。1980（昭和



竣工して間もない八戸市庁。
右隣の建物は木造校舎時代の八戸小学校。
1960（昭和35）年10月29日・青森県史編さん資料

八戸市庁

発展と克服の象徴

中園 裕

（県民生活文化課 県史編さんグループ 主幹）

た。実際に八戸市庁の建設中に、県庁も木造校舎のよくな旧庁舎を撤去し、現在の庁舎を新築中だった。現県庁の落成式は1961（昭和36）年1月22日だった。八戸市庁は県庁より早く落成式を向かえたのだ。

八戸市庁は地下1階、地上3階の鉄筋コンクリート造りで、まだ木造家屋が多かった時代に、大変斬新な建物として登場した。この庁舎で最も目立ったのが、屋上部分に建てられた5階建ての塔屋である。塔屋の最上階は地上31メートル近くあり、展望台の役割を果たした。当時の塔屋からは四方八方が広く見渡せ、臨海工場地帯も鮮明に見えた。

しかし1968（昭和43）年5月16日の十勝沖地震で、塔屋の最上階が倒壊。職員1人が死亡し、数人が怪我をする大惨事となった。このため塔屋は撤去された。

その後、八戸市は復旧対策と共に街並みを整備していった。市庁北隣にあった八戸小学校は、1974（昭和49）年1月の火災で全焼。翌年5月、跡地と三八城公園の一部に八戸市公会堂ができた。市庁自体も老朽化し手狭となったので、市制施行50周年記念事業の一環として新庁舎の建設に着手。1980（昭和